土地改良　315号　2021.10

巻頭言

牛に引かれて善光寺へ

大成建設株式会社　代表取締役副社長　田中　茂義

善光寺から少し離れた村里に欲張りで信仰心の薄い老婆が住んでいた。ある日、川でさらしていた布を一頭の牛が角に引っかけて走り去った。布を取り戻すために牛を追いかけた老婆が辿り着いたのは善光寺。日も暮れたのでお寺の本堂で夜を明かすと、夢枕に如来様が立ち、今までの不信心を諭された。目覚めた老婆はこれまでの振る舞いを悔い、自分を善光寺に導いてくださった如来様に感謝し、その後は信心深く周囲に優しく接して心安らかに過ごしたと言う。

ここ一年半以上のコロナ禍を機に、思いがけなく諸事が変革され生産性向上が図られつつある現状が、まさに善光寺参りの言い伝えを想起させる。コロナという牛に引かれて善光寺にたどり着いた老婆が我々現代人の姿と重なり合う。

マスク着用や隔離などの対策は百年前のスペイン風邪が流行した当時と変わらない。しかしその一方で、ワクチン開発に加えて革新的技術開発とその利活用が急ピッチで実行に移され、非接触をキーワードとした働き方改革やビジネスモデルへの変革が進んでいる。

最近、デパートがデジタルツインによる新しいビジネスモデルを展開しているという。デジタル空間にデパート売り場を再現し、客がデジタル空間を自身のアバターで回遊し、接客を受けて買い物を体験するというものである。現実のモノや環境をデジタル空間に再現するデジタルツインにより、この様な買い物が可能となった。さらには人の流れなどのデータを重ね合わせることにより街づくりや防災へ利用することも検討されている。

土地改良事業においても遠隔臨場の試行が拡大され、検査の効率化や労働時間の短縮が図られている。また農作物の栽培や管理に自動運転トラクターや収穫ロボット、ドローン等が使用されるなど、ＩＣＴ機器の活用が始まった。カメラとＡＩによる生育状況の管理などによって農作物の品質が向上し更に生産量も上がり、農業がより魅力的なものに変わりつつある。これらの変化は若者にもアピールし、その結果、農業の担い手が増えるのではと期待感が高まっている。農業分野における有力ベンチャーもその数が増えており、農業を担う人々の層が徐々に厚くなっている。今まさにロボットやＡＩを導入したスマート農業への変革が進行中であり、実装に向けて着々と歩み進めている。

コロナ禍により人々は往来を止め、ステイホームを余儀なくされた。この一方でＤＸという変革を促し、働き方やコミュニケーションの取り方を見直すきっかけを作ったと言える。コロナは人類を襲った厄災である。しかし、コロナによって得た貴重なものもある。コロナ禍でこれまでの常識ややり方が通用しなくなった現状とこれを打破すべく進展しつつある技術革新の現況をみたとき、私はつくづくそう思うのである。